

独立分詞構文

— 変る, かわる, 言葉は変る — Ablativus; Dative;
Objective; Nominative. —
— 英語の語源と由来 —

菅 沼 惇

目 次

1. 現代英語での状況
2. 英語での源—Dative Absolute.
3. その又源 —Ablative Absolute.
4. 中期英語での状況
5. まとめと鳥瞰

1. 現代英語での状況

現代英語で、分詞が中心語となって可愛い恰好の一まとまりの句を成し、主節と、何となく程良く離れているかとも離れていないとも思える程の、しかも形容詞句的かともまがうような副詞句的な係り方で働くものが、分詞構文と呼ばれるものである。その場合、一般には論理上の主語が主節の主語と一致しているものである。

(A) 一般型分詞構文

ふと心に上ってきた状況を英語で表してみても、その一二の用例を先ず示しておく。

- (1) a. Opening the door, the man found a boy sleeping there.
- b. Opened violently, the door made a big noise.

その、分詞構文と主節の、係り方は母国語人の直感、内示的 (implicit) な理解であるが、それを今度は可視的明示 (explicit) になるように、普通の節表現で書き替えておこう。

(1') a. When he opened the door, the man found a boy sleeping there.

b. As it was opened violently, the door made a big noise.

すると(1)を図解入りで示すと次の通りになる。

(1'') a. Opening the door, the man found a boy sleeping there.

b. Opened violently, the door made a big noise.

そして結局、形式化してしまうと、次の通りになる。

(2) $\left\{ \begin{array}{l} \sim\text{ing} \\ \sim\text{en} \end{array} \right\} + X, S + V + Y \dots\dots$ 一般型分詞構文のパターン¹⁾

$\left[\begin{array}{l} \text{但し, } \sim\text{ing} = \text{現在分詞} \quad S = \text{主語} \quad X \\ \sim\text{en} = \text{過去分詞} \quad V = \text{述語動詞} \quad Y \end{array} \right\} = \text{可能な変数的語句}$

(B) 独立型分詞構文

今上で全く形式化した1.(A)(2)と対照がよくいくように、こっちも形式化から入ってみると、次の型の分詞構文がある。

(1) $S_2 + \left\{ \begin{array}{l} \sim\text{ing} \\ \sim\text{en} \end{array} \right\} + X, S_1 + V + Y \dots\dots$ 独立型分詞構文のパターン

この形式に合った例文を、先の(A)(1)の例文とよく繋りができるように又造り上げてみよう。

(2) a. He opening the door, I found a boy sleeping there.

b. The door opened violently, I stood up frightened.

このように今度の分詞構文は、やはり大きい木の幹の一つの枝ではあるが、もう分家でもしそうな形をなして自分だけの新しい主語を持っている。そういうわけで独立分詞構文と言うのであろう。

2. 独立分詞構文の英語での源—Dative Absolute.

皆さん、小川の源を訪ねたことがありますか？湧き水、泉です、清い小

注1) このパターンは文の主語がどのような支配関係にあるかを、分詞構文の成り立ちと共に明示したものであり、分詞の諸形態、分詞構文の位置、接続詞+分詞構文等他にも諸現象がある。

砂が躍っている、水の小さな塊が小踊りしている、辺り一面清い砂で腐葉土はない。昔々の英語の源流に遊ぶ時色々と珍しい現象に出遭って心躍り、目を見はるであろう。この独立分詞構文にしても又そうである。

英語として一番古い方の用例として私が見出した古期英語時代のものは、元来多くは使われなかったのであるが、次のもの等である。

(1) a²⁾. Gyf he sunnan scinend <?> e ðæt deð, he bið scyldig ꝛ swelte he : *EXOD. XXII*-³

(=If he the sun shining does that, he will be guilty and die :)³⁾

b⁴⁾. Him ða soplice ðas þing þencendum, Drihtnes engel on swefnum ætywde, and him to cwæp, … *Matthew I*-²⁰

(=He then truly thinking these things, the Lord's angel appeared in the dream, and quoth to him, …)

c. And, him forlætenum, he ferde. *Matthew XVI*-⁴

(=And, they left, he went forth.)

これらの中で、先ず(1 a)はGyf節中のSとVの間に割り込んだ独立型分詞構文であることをより解り易くするため関係箇所をクローズ・アップして、語順を一部入れ替えて、より普通の姿で眺めてみると、先ず次の通りになる。

(1') a. Sunnan scinendre, he deð ðæt.

故意に一つの独立文にしておいた、先のMod Eのパターン(B)(1)とも、細くはOld Englishの独立型分詞構文はそれと合致しない所もあるが、輪廓上合って解り易いように。事を荒削りにして述べると、sunnanはsunのこと、scinendreはshiningのこと、deðはdoes(原形don^{+3 単現 eth}→doeth→deth)であり、ðætはthatであるというように理解いただいておくこと

注2) OE版*Heptateuch*に1例だけ見出せたもの。拙著(1993)『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』香川大学教育学部研究叢書3.のIX.b.分詞構文参照。

3) ModE訳は著者による。以下同じ。

4) Bosworth, J. (ed.1888) *The Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*より、又次のb.も同書より引用。

にする。

次に細かく述べると、sunはOEでsunneであって、弱変化女性名詞でこのsunnanは一般には対格/属格/与格単数と主格/対格複数合計5通りの可能性を具えもって居り、それらの中でどれか1つがこの文中のしかも分詞構文という環境で分詞scinendreに束縛されて選ばれることになる。

一方OE scinendreは現在分詞scinendeの属格/与格単数女性の屈折形であり、先ず主節 he deð ðæt に準動詞的なものが係ろうとして、「なだらかな状態的なもの」を表そうとして、to不定詞でもない、動名詞でもない、分詞が選ばれたことになるが、その分詞が事もあろうに（そのことについては後述(3乃至4)する)先の2つの可能性の中「与格」が選ばれたことになる。

そしてその与格分詞が与格名詞sunnanに添えられて一まとまりの句になったのだ。大変細かなことに立ち至った。次に図式的にも整理しておく。

(1^o) a. sunnan scinendre
 + (dat s f) + (dat s f) ----- 選択

$\left[\begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{acc.} \\ \text{gen.} \\ \text{dat.} \end{array} \right\} \text{ s.f.} \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{nom.} \\ \text{acc.} \end{array} \right\} \text{ pl.f.} \end{array} \right]$	+	$\left[\begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{gen.} \\ \text{dat.} \end{array} \right\} \text{ s.f.} \end{array} \right]$	----- 可能性
--	---	---	-----------

但し、

{	nom. = 主格
{	acc. = 対格
{	gen. = 属格
{	dat. = 与格
s.	= 単数
f.	= 女性
{ }	= 選択可
[]	= 性質
+	= 性質有り

以上の局部的理解がいった後で、それを又原文に埋め込んで全貌的理解が生まれればよい。

次に (1 b) と (1 c) の分析は次の通りである。

(1^o) b. Him ðas ping þencendum,
 + (dat s m) + (dat s m) ----- 選択結果

$+ \left[\begin{array}{l} \text{dat.} \left\{ \begin{array}{l} \text{s.} \left\{ \begin{array}{l} \text{m.} \\ \text{n.} \end{array} \right\} \right\} \\ \text{pl.} \end{array} \right]$	+	$\left[\begin{array}{l} \text{dat.} \left\{ \begin{array}{l} \text{s.} \left\{ \begin{array}{l} \text{m.} \\ \text{n.} \end{array} \right\} \right\} \\ \text{pl.} \end{array} \right]$	----- 可能性
--	---	--	-----------

(= That if the sun sprung he does this, he will be guilty of blood and will die.)

b. haec autem eo cogitante ecce angelus Domini in somnis apparuit ei dicens … (= but him thinking these, behold the Lord's angel appeared in a dream, saying him…)

c. et relictis illis abiit (= and them left, he went away)

先ず (1 a) の orto sole であるが、orto は orior (= arise) の p.p. ortus の abl. (奪格) で (もしこれを現在分詞にすると oriens となり、歴史で耳にする古代 Orient のことを思い出してよい。ただそれは英語化した語。)⁷⁾、sole は sol (= sun) の abl. で、又歌曲 オー・ソレ・ミオ (O Sole Mio) とか パラソル (parasol) とか solar system が思い出されることだろう。そしてこの orto sole が一まとまりの句を成して使われたのである。そういう句のことをラテン文法では奪格別句 (Ablative Absolute) というが後述する。

(1 b) では、cogitante⁸⁾ が cogitare (= think, consider) の p.pres. (現在分詞) cogitans の abl. で、eo は指示代名詞 is (= その人) の abl. sgl. でその二つで奪格別句の主要部をなしている。haec はやはり指示代名詞 hic⁹⁾

注7) その辺のことについては拙論 (1990) 「私は病院でキリストに逢った — ~ende と ~end; ~ens と ~ent — 英語の語源と由来」『一般教育研究』第37号、香川大学一般教育部、参照。

8) この cogitante からは読者はかの有名な哲学者の言 Cogito, ergo sum. (= I think, therefor I am.) を思い出してもらいたい。

9) この hic という語は、何やら「ヒック」が喉から出てきそうだが、やはりラテン語らしい語の一つで、色々玉三郎七変化どころか35変化もする小さな語である。読者の心は、そうそうもう Shakespeare の Hamlet の亡霊のところへと跳んで夢の中ではないかと思うのだが、Ghost がモグラ (mole) のようにあちこちで “Swear.” を繰り返すので Hamlet が “Hic et ubique ? then we'll shift our ground …” I. i. 156 と言ったラテン語混りのセリフの中のこの hic なる語を連想させる同類語であるし、又 (1 a) に hoc が出ていて又々丁度関係が…! これは hic の中性対格単数であり、今度は夢一杯の Shakespeare のセリフならぬ、一転味も素気もない理詰めの現代言語学理論 (GG理論) で universal 性のないことをよく ad hoc (こだけ (に限られている)) と言っているその hoc に連ることばである。

(=this) の中性対格複数である。(その他下線部外の文の中にも (1 a) の morietur と Man is mortal, …の mortal, (1 b) の angelus と Los Angelus, apparuit と appeared, 又 *Hamlet* には亡霊という英語が幾種類現れるか集めてみるのも面白い, その一つ apparition とか, Vulgate Latin 版 Bible に出るわ出るわの *dicens* (=saying) (それと対応して OE 版 *Heptateuch* では *quoth* の類出), この語を見たら又何を連想しますか? 「お話好きの」文豪 Dickens を連想して下さい。これ又丁度語呂合せも中味もよく合っていて面白い—アクセントだけが違っている。…等々ありますが (その他一部注記^{5) 6)} している) もうこうなると止らない, 止らない。ことば, ことば, ことばのお話である。

ここで又, 次の通りにパターン化しておく。

$$(2) \left\{ \begin{array}{l} N \\ \text{pron} \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{l} \sim \text{ens} \\ \sim \text{tus} \end{array} \right\} + X, (N+) + V + Y \text{ ---- 奪格別句 (Latin)} \\ + \{ \text{abl.} \} + \{ \text{abl.} \} \quad + \{ \text{nom.} \}$$

(ラテン語では必ずしも主語を必要としないので (N+) とした。)

そして次に奪格別句又は独立奪格の構文について説明をしておこう。

奪格別句 (Ablativus Absolutus) について

ラテン語の格は主格・呼格・対格・属格・与格・奪格・地格 (nom・voc・acc・gen・dat・abl・loc) である。そして奪格は分離・原因・手段・方法・時・場所というように諸関係を表すために使われる。この格は, 先ずその名称通りに, 「～から」というのが印象的な格で, Ablativus という語は *aufero* (奪い去る) という語から出た語で, その *aufero* は *ab* + *fero* が訛った語で, *ab* は「～から」の意味の前置詞であり, *fero* は (ひょっとしたら *ferry boat* の *ferry* と関係のある語) 「運ぶ」の意味の語であり, 従って「人から物を奪う」というのが *aufero* という語である。

従って *ab* + 奪格名詞・代名詞, 又 *ab* は *b* が落ちて *a* + 奪格名詞・代名詞, 又は前置詞なしに奪格名詞・代名詞だけでというように使われる。

次例のようなものである。

(i)¹⁰ a. et diuidat aquas ab aquis, GEN. I-6

(=and divide the waters from the waters,)

b. [Deus] diuisit lucem a tenebris. GEN, I-4

(= [God] divided the light from the darknesses.)

手段・方法・状態の意味で使われる奪格の例は次のようなものである。

(ii)¹¹ a. nequamquam ultra interficietur omnis caro aquis diluuii,

GEN. IX-11

(=I shall never kill all the flesh with the diluvial waters,)

b. Agricola agrum magna cura arat.

(農夫は大いに注意して畑を耕す。)

c. Caesar Labienus in Galliam magno exercitu misit.

(カエサルはラビエヌスを大軍をつけてガリアへ送った。)

この用法でもし前置詞を付けて表現すると cum + 奪格名詞・代名詞であった。

そこで奪格別句であるが、奪格奪格とあまりにもこの「奪う」格という直感が出過ぎると逆効果で、妙味から遠のくので、奪格の一用法の手段とか方法とか状態というものをよく打ち出して感じれば妙味の方へ近づくのだ。即ちこの「状態」的用法、上の用例 (ii) の用い方の名詞・代名詞に形容詞や分詞が奪格屈折で添えられて一まとまりの句になって色々な附帯状況を表すようになったのが奪格別句¹²⁾、別称独立奪格なのだと考えればよい。それならばちゃんと英語にもあるあの with+O+Cの附帯状況構文のよう

注10) この用例はa.bが拙編(1989)『GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, ME等への入門として』からである。付属のMod E訳も私の試訳である。

11) (iia) は *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Clementiam* より、又 (iib, c) は田中秀央(1951²⁾)『ラテン文法入門』p.39他からで、付属の日本語訳もそのままの転載である。これは43年も昔のなつかしい大学教養部の時のテキストである。横にいた仏文(予定)の友人は今某大学の仏文学教授。紙というものは本当に強いものである、戦後の藁半紙なのに、だから可愛い、今時の本は紙が良過ぎて重過ぎる。

なものである。ラテン語も cum (=with) が付いたり付かなかったりするし、英語もそうである。そしてそれらをまとめて Kruishinga¹³⁾はFree Adjunctsと呼んだ。あれを思い当ればよい。奪格別句の用例はもう先に挙げた。

4. 中期英語での状況

古期英語の時代からずっと4世紀も時が移るとWycliffe訳聖書では特にその前版訳にVulgate Latin版からの直訳的な独立型分詞構文が夥しく現れる¹⁴⁾。丁度対照がよく効くように2 (1 a, b, c) の対応箇所を列挙する。

- (1) a. and if the sunnespronge he do that, he hath doon manslaughter, and he shal die. *EXOD. XXII-3*
- b. Sothely hym thenkynge these thingus, lo ! the angel of the Lord aperide in sleepe to hym, sayinge, …*Matthew I-20*
- c. And hem forsaken, he wente away. *Matthew XVI-4*

中期英語時代も後半期では、屈折も、品詞によってはかなり温存されているものもあるが、名詞・代名詞は合流して単純化しているので、OE版では与格を使っていた(1 a)のsunnanもここでは通格のsunne, 又人称代名詞使用例の(1 b, c)もOE版では対格hineとくっきり区別のあった与格himのhimが使ってあった処がここでは目的格hymが使われているし、又OE版では対格higとしっかり区別のあった与格him (これは複数)を使っていた処をここでは区別のない目的格hemを使っている。

注12)ところがギリシヤ語にはGenitive Absoluteといって属格が、或は又対格が使われるものまである。その所以は何なのかは今後の研究の為にとこ、でビーコンとして注記しておく。次の例等である。新約の英訳はギリシヤ語訳からである。

ταῦτα δὲ αὐτοῦ ἐνθυμηθέντος, ἰδοὺ, ἄγγελος Κυρίου κατ' ὄναρ ἐφάνη αὐτῷ, λέγων, …Matthew I-20 (The English Hexapla, より)

(=and then his considering, behold, the Lord's angel appeared in the dream, and said,)

13) Kruishinga (1932) 2090 ff

14) 拙論 (1988) *op. cit.*

そして使用分詞も屈折を失っている。尚(1 a)の分詞であるが、このsprongeはspringenのp.p.の一種である。sprungenという形態がp.p.と判断し易い形態であろうが、まあここではsprongeが使われていたというだけのことである。ただもしy-でもついていたらもっと判然としたであろうが。

更に又そのp.p.を使ったことについてであるが、OE版ではscinendreと現在分詞を使用していて、両者が合致していないことである。又丁度今度はV. Latin版の対応箇所を見て貰えば判るが、そこではorto即ちortusという過去分詞を使っている。そこでWycliffe版の方はそのLatin版をそのまま移植して過去分詞を使ったのであろう。OE版は微細な点ではやはり変な感じがするが、現在分詞使用という大局的には素直であるが、ME版は微細な点での奇妙さは失くなったが、過去分詞の使用は異様である。

とは言え、まあそのように夥しく移植されたのである。そこでそれらをパターン化しておく次のようになる。

$$(2) \left\{ \begin{array}{l} (A) \begin{array}{l} N \\ +_{(com)} \end{array} + \left\{ \begin{array}{l} \sim inge \\ \sim en \end{array} \right\} + X, \begin{array}{l} N + V + Y \\ +_{(nom)} \end{array} \\ (B) \begin{array}{l} Pron \\ +_{(obj)} \end{array} + \left\{ \begin{array}{l} \sim inge \\ \sim en \end{array} \right\} + X, \begin{array}{l} N + V + Y \\ +_{(nom)} \end{array} \end{array} \right\} \text{----- 独立分詞構文の} \\ \text{パターン(ME)}$$

5. まとめと鳥瞰

最初ラテン語で奪格別句 (Ablative Absolute) で、論理的主語に当る奪格の名詞・代名詞と同じく奪格の分詞を並べて、分詞は目的語等を取りながら、一つのまとまりある状態的句をなして使われていたものを、古期英語期から英語に採り入れたが、英語には奪格はなく、それとかなり類似した用法をもつ与格を利用して論理的な主語を与格の名詞・代名詞で表し、それに同じく与格の分詞を添え、分詞は目的語等を取りながら、状態を表す一まとまりの句として使った。そして中期英語期になると一般に屈折の平坦化が起るので独立分詞構文の論理上の主語には通格の名詞、又代名詞は目的格が、使われ、それに普通の分詞が添えられて使われるようになり、

引用・参考文献

- Biblioteca de Autores Cristianos 1982. *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Clementiam*. Mateo Inurria, Madrid.
- Bosworth, J. (ed.) 1888. *The Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*. Reeves & Turner.
- Crawford, S. J. (ed.) 1922. *The Old English Version of The Heptateuch, Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*. OUP.
- Erasmus 編 1516. (臨川ファクシミリ 1989) NOVUM INSTRUMENTUM (ギ・ラ語新約聖書)
- Forshall, J. & F. Madden (eds.) 1850. *THE HOLY BIBLE, containing The Old and New Testaments, with the Apocryphal Books, in the Earliest English Versions made from the Latin Vulgate by J. Wycliffe & his followers*. OUP.
- 市河三喜 (編注) 1961. *Hamlet*. 研究社
- Kruisinga, E. 1932⁵. *A HANDBOOK OF PRESENT-DAY ENGLISH PART II. 3*. Croningen.
- Onions, C. T. 1965⁶. *An Advanced English Syntax*. Routledge & Kegan Paul.
- 菅沼 惇. 1988. 「分詞構文研究—OE版, V. Latin版, ME版 GENESIS において」『研究報告』第 I 部第 72 号. 香川大学教育学部。
- . (編) 1989. 『GENESIS IN 4 VERSIONS—OE, ME 等への入門として』大阪教育図書。
- . 1990. 「私は病院でキリストに逢った—~ende と ~end; ~ens と ~ent—英語の語源と由来」『一般教育研究』香川大学一般教育部。
- . 1992. 「二重目的語構文の受動文—IOを主語化する構文の起源と発達に関する Jespersen 理論の検証」『研究報告』第 I 部第 84 号。

香川大学教育学部。

———. 1993. 『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』香川大学
教育学部研究叢書 3。

田中秀央 1951. 『ラテン文法入門』白井書房。

The English Hexapla. 1975. AMS Press.